



うに、罪業深き身であること  
を、知らされるのです。それ  
までは自分を「賢い善人」で  
あるかのように、自分を思い  
こんでいて、わが身の真の姿  
を知らず、それゆえ自分の生  
き方になんらやましいことは  
ないようにならぬば、救われ  
ねばならぬ身とは知りません  
でした。今、わが身は、我執  
・我愛の煩惱熾盛の身であつ  
て、自分の力では手の施しよ  
うのない「難治の病い」の身  
であると知らせていただくの  
です。

そして同時に、自らにては  
治し難き身を治したまう如来  
大悲の恩徳を知らせていただ  
くことが極めて大事なのです。  
先ほどの教行証文類の引用の  
すぐ後に、聖人は  
「難化の三機・難治の三病は、  
大悲の弘誓を憑(たの)み、  
利他の信海に帰すれば、これ  
を矜哀(こうあい)して治す、  
これを憐憫(れんみん)として  
療したまう。たとえば醍醐の  
妙薬の一切の病を療するがご  
とし。濁世の庶類・穢悪の群  
生、金剛不壞の真心を求念す  
べし。本願醍醐の妙薬を執持  
すべきなり」と  
とお示し下さっています。な  
かなか難しい言葉です。か  
いつまんで申しますと、……  
煩惱の深く罪悪の重い衆生も、  
一切の衆生を引き受けて助  
けずんばおかない」という阿  
弥陀仏の広大な大悲の誓いに  
わが身をお任せするならば、  
阿彌陀仏はそんな私どもを哀  
れんで我等の罪業のすべてを  
浄化し仏陀たらしめて下さる。  
であれば、煩惱・悪業にまみ

れた私どもは、重病にかかっ  
て永遠にほろんでしまうよう  
な私を治したもう阿彌陀仏の  
本願のまことをいただき、ご  
本願の特効薬であるお念仏を  
いただいで称えていくべきで  
ある……というおぼしめしで  
あります。

もし煩惱深く浅ましい身で  
あると知るだけならば、この  
身をのろうか、嘆くか、ある  
いは「この私をどうしましよ  
う」とこれから救いを求めて  
いくか、どちらにしる悪業の  
身のままではたえれるものでは  
ありません。ちようど、お医  
者さんに「あなたは重病です」  
と言いわれたされた者は、じつ  
としておれないようなもので  
す。とても「有難うございま  
す。ようこそ知らせていただ  
きました」などとのんきなこ  
とを言っておられませんか。煩  
悩の深い者と知らされました  
というだけで落ち着いておれ  
るならば、それはそれほど救  
がたい身であるとは実際には  
感じていないからではないで  
しょうか。「地獄一定の身」と  
よくいわれますが、もしそれ  
だけで、そこに弥陀の本願の  
救いが来ていなければ、地獄  
一定の身はまったく絶望の暗  
黒以外にはありません。

助かる縁のなき身ぞと  
教えて救う 弥陀の喚び声  
というのがあります。全  
くその通りです。私どもにお念  
仏が申され、またお念仏を聞  
かせていただくこと、それは  
本願醍醐の妙薬を与えてくだ  
さることです。与えて下さる  
特効薬を飲むことが信じるこ  
とです。信じないのはせつか  
くの薬を捨ててしまうこと  
です。親鸞聖人もお念仏を申す  
身になることを  
「阿彌陀仏のくすりをつねに  
このみめす身となりておわし  
ましおうてさうろうぞかし」  
と申されておられるように、阿  
彌陀仏より与えたもう念仏を阿  
彌陀仏のくすりと仰せられて  
います。

いのです。ザンゲばかりの世  
界は道徳の世界で宗教の世界  
ではありませぬ。(岩波文庫「西  
田幾太郎隨筆集」P三六四)  
と言っています。これは、弥  
陀の呼び声というものが出来  
ない浄土教は浄土教になら  
ないこと、そして自己の罪や  
悪を懺悔するだけでは道徳で  
あつて、宗教ではないことを  
言っているのです。どうして  
そうなるかといえ、宗教を  
体験的に了解せずに、観念的  
にのみ知ろうとするからだ  
に、不思議な、弥陀の誓願  
か、真宗を了解しようとする  
と、とかくザンゲ話や感謝の  
話に終わってしまい、道徳に  
落ちてしまいます。

【寺院ニュース・雑感】  
\*十一月十一日と十二日。堺別院  
報恩講参詣。十年ほど前に養成講  
座の研修会で泊まりがけで行った  
ことがあるので今回で二回目であ  
る。参詣者は本堂にほぼ一杯。  
\*二十日。念仏会。東岡さんが中  
国旅行の写真や資料を持参し、見  
せていただく。道元のいた天童寺、  
鑑眞の縁のあった阿育王寺、普陀  
山、それに天台山などの仏教の聖  
地の参拝をされた。私も六年ほど  
前、息子と一緒に神戸から船で上  
海に渡り、天童寺や天台山にお詣  
りしたことがあるので懐かしい。  
東岡さんの話では聖地もさること  
ながら一行の人たちから随分啓発  
され、不思議な出会いがあり、頗  
る有難かつたとのこと。後日、旅  
行のビデオを見せてもらう。中国  
は随・唐・宋の時代にあれだけ仏  
教が盛んになりながら、今日往時  
と比べて全く見る影もないのは実  
に淋しい。現代中国の十三億の民  
は何を人生に求めようとしている  
のか。日本も本質的に変わりはない  
のであるが、その点が非常に気  
になるのである。  
\*二十二日の同朋会に、堺別院で  
初めてあつた坂青年も来寺。しば  
し、一生相続の念佛聞法の道ある  
のみと、共に確認する。木村無相  
さんを慕っているとのこと。有難  
いことである。



# 信心夜話

香樹院師いわく。

「およそ人々は、我心中をこしらえる事にかかりはておるから、その心中は我こしらえものじゃ。教える人も唯理屈のみを教えてこしらえることに骨を折る。信心とは聞其名号信心歡喜の八字を我が腸にするばかりじゃに、そう思う人はなほだ少なきは残念なことじゃ」

一蓮院秀存いわく、  
「唯仏の力一つにて助けたまうぞと信ずる外に聞其名号という事もなしと聴聞いたしました」

師いわく、  
「それでよしそれでよし」

(「蓮院談合録」より)

(信心という自分の心に何か信心らしいものができることのように思いがちだが、そうではない。いよいよ我が心はそらごとたわごと、まったく空っぽで何一つ信心らしい顔はない。その無信の機、闡提の私に阿弥陀さまはどう仰せられるか。どこでどう聞いた、あの先生からああ聞いたという、聞き込んだものは死にも。そんなものを握って、アテにしているのは聞いた心にだまされていること。聞いたものをたのむのではない。分かった道理を力にするのではない。分かった道理や理屈を力にしているのは、まだ我が分別をたのみにしているのである。今、どうしてみようもない、空っぽの私に南無阿弥陀仏はどう聞こえる。名号はどう聞こえる。一蓮院師は「我が力ばかりで汝をタスケル」と、仰せを聞いている。不思議な仰せ、大悲のお心を聞いている。そのほかにどこに信心はあるう。信心の中身は弥陀の仰せである。仏語である。)



雲珠  
(C)SHOGAKUKAN INC.

# 真宗聖典講座

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もつしたること、いまだそうらわす。そのゆえは、一切の有情は、みなもつて世々生々、父の兄弟なり。いずれもいずれも、この順次に仏になりて、たすけそうらわすべきなり。わがちからにてはげむ善にてもそうらわばこそ、念仏を回向して、父母をもたすけそうらわめ。ただ自力をすて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦しめりとも、神通方便をもつて、まず有縁を度すべきなりと云々

(歎異鈔第五章)

## 歎異鈔第五章第二講

この第五章は、梯實圓著「歎異鈔」によれば、源信僧都の『往生要集』の「欣求浄土門」のところによって述べられたものであると言われています。そこには浄土に往生した人が獲得する素晴らしい徳の中に「引接縁樂」というのがあって、浄土の聖衆(菩薩)は迷える人びとを自在に救うていくありさまが示されています。「欣求浄土門」には「第六に引接縁樂とは、人の世にあるに、求むるところ意のごとくならず。樹、静かならんと欲すれども風怒まず、子、養わんと欲すれども親またず。志、肝胆をわく(心をこめて親につくす)といえども、力、水菽にたえず(貧しすぎて孝行ができない)……生処(生きていく境界)あいへだつれば、六趣(六道)四生、いづれの処なるかを知らず。野の獣も、山の禽(とり)も、だれか旧親(むかしの親愛)を弁(知りわけ)る。ぜん。『心地観経』の偈にいうがごとし、……有情は、輪廻して六道に生ずること、なおし車輪の始終なきがごとし。あるいは父母となり、男女となりて、世々生々にたがいに恩ありと。

もし極樂に生ずれば、智慧高明にして、神通は洞らかに達し、世々生々の恩所(恩をうけた人)、知識(先生)、心に随いて引接せん。天眼をもつては、生処を見、天耳をもつては、言音をきき、宿命智をもつては、その恩をおもひ、他心智をもつては、その心をさとり、神通通(神足通)をもつては、随逐し、変現し、方便力をもつては教誡し、示道せん」といわれています。梯師は

「有情というのは、心あるもの、いのちあるものということで、衆生と同じ意味です。いのちあるすべてのものは、はてしない過去から、それぞれのなした行いの結果としてのさまざまな生存を限りなく続けてきたといわれています。それを輪廻転生とよんでいます。それは、まるで車輪が回転するように生と死とをくりかえしていくと考えられていたからです。こうしていくたびも世をかえ、生存をかえていく世世、生生のあいだには、おたがいに、あるときは父となり母となり子となり、あるときは夫婦となりあつたときもあるに違いないのです。こうした輪廻転生信仰に根ざした万物との深い親近感、奈良時代にた有名人行基の作という

山鳥のほろほろと鳴く声きけば  
父かとぞおもふ母かとぞおもふ

という古歌にみごとに表現されていました。人里遠くはなれた山中で修行をしていた行基が、山鳥の声を、父の生まれかわりか、母の生まれかわりかと、深い想いをこめて聞きいつているありさまが心にひびいてきます。人はいうまでもなく、鳥にも、獣にも、さらに地にはう小さな虫にも、過去世においては、お互いに父であり母であり、兄弟であり、夫婦であつたかと思いをはせるとき、鳥とも獣とも心を通わせ、虫とも共感しあうような深いいのちの世界が広がってゆきます。

輪廻転生という教説は、さまざま要素が複合した宗教思想で、よほど注意深く味わわなければなりません。その中にはここにのべられたような万物との一体感をともなつた深い生命観が秘められています。私たちにも豊かでないのちの視野を開いてくれます。

と解説してくださっています。そうした輪廻転生観を背景にして、聖人は「六道・四生の業苦しめりとも神通方便をもつて、まず有縁を度すべきな

り」という思召しをのべられたものと思いますが、それについて梯師は

「このように、浄土に往生すれば、神通力を完成し、この世ではどうしてやろうもなかつた父母・兄弟をはじめ、一切の有情に仏縁をむすび、ことごとく極樂に導いてゆくことができるといわれています。神通力とは、すべてを見通す天眼通、あらゆる声を聞きわけける天耳通、自他の過去世のありさまを知りつくす宿命通、あらゆる人の心の内を知る他心通、どこへでも自在に行動できる神足通といふ五種の超人的な能力と、煩惱を完全になくした漏尽通とを合わせたもので、六神通とよんでいます。この神通力をもって、世々生々の父母・兄弟がたとえ地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上といった六種の迷いの境涯（六道）のどこかに生まれて苦悩を受けていようと、ことごとく救いとげてゆこうというのです。」と解説されています。

長々と梯師の説明を引用させていただきましたが、この第五章を読む場合、背景となつていいる仏教の教説をやはり正確に理解しておかないと、勝手な解釈に墮しかねないからです。文章の正確な理解をした上で、私たちがこの第五章から何を教えられるかを尋ねてゆきたいと思ひます。

輪廻転生説はもともと仏教が起る以前からインドで信じられていた宗教思想ですが、それが仏教の教説の中に、仏教的な理解の枠組みのなかで取り入れられ消化されて、ある意味で仏教の教説を豊かにしてきました。ただ輪廻転生説は仏教の基本に照らして注意して受け取る必要があります。すなわち仏教の基本思想である「空の道理」に基づいてこの輪廻転生説を理解しなければなりません。然るにこれを、「私は死んで次の世界でまた生まれ変わって違つた生きものになる」とか「私は過去は馬であつた」とか、「前世は武士だつた」というように、実体的なもの（我）が世を変えて別な形に変化していくように受け取るなら、それは仏教ではなくてヒンズー教の輪廻転生観になつてしまひます。今日でも、輪廻説を実体的にとらえて強調する宗教や思想が現にありまひます。

また、これを業報説と結びつけて、「あの人が病氣

で不幸なのは過去で悪業を行ったからである」とか「あの人たちの生まれが悪いのは過去世で重い罪業を犯したからだ」というような大きな邪見に陥る場合がありまひます。これらは、仏教のいう業報説でもなければ輪廻転生説でもありません。

親鸞聖人ご自身は輪廻転生説を強調されたところは見あたりません。かといつてこれを否定されていたのではありませぬ。この説の中にある豊かな広い視点は受容されていたと思ひます。今、この第五章において、生きとし生けるものの間の生命の共感を「世々生々の父母兄弟」といふ「往生要集」の輪廻説において表現されたのではないのでしょうか。

すべての生きものは私の父母兄弟であるという生命の連帯感、一体感、聖人のご縁の深い天台宗で重く用いられる「梵網経」といふお経にも出ています。その一節に

「一切の男子はこれわが父なり。一切の女人はこれわが母なり。わが生々の父母より生をうく。故に一切の有情みなわが父母なり」といふ教説がありまひます。すべてのいのちとの親近感、連帯感が端的に表現されています。「我と他者とは分離したものではなく、本来一体ないのちである」といふ佛智から現れた生命感だと思ひます。

この第五章から響いてくるのは、輪廻転生説をよくに云々することではなく、一切の有情との親しく平等ないのちの連帯感情です。先輩が「ひとつのいのちをみんな生きていふ」といわれましたが、同じ生命感の表現であると思ひます。これは佛智に連なる見方、感じ方でありまひます。

そうした感じ方や見方から、ただ自分の直接の親とか家系上の先祖だけの教養（供養）をこととするような行いは、仏法をいただいて生きる者のあるべき姿ではないことをここで示されていると伺ふことが出来まひます。「我が先祖・我が家系」を特別に大事にする（執着する）のは、儒教的な先祖観から来ていふと思ひます。血縁的に親しい者と疎遠な者を分け、親しい者だけの幸せを願うような仏事は凡夫の情としては納得できても、それは純粹なお仏事ではありません。

ここで聖人は、一切の衆生は父母兄弟としてのいのちの平等なつながりのなかにあるのであれば、一切の衆生も共に助けられるべきものであり、「いづれなり」と仰せられるのでありまひます。

このことは、たとえば例の「靖国神社問題」にもかかわつてきまひます。靖国神社では、戦没者を「日本の」「戦争行為に従事して亡くなった軍人」に限定して、それを「英霊」として弔う行事をしていふ。このたびの戦争で犠牲になつたのは日本人だけではありませぬ。朝鮮半島の人も、中国の人も、フィリッピンの人、たくさんの方が犠牲になりました。しかし、靖国神社では彼らの死にたいしては顧慮されていませぬ。それは「日本人ではない」からなのです。日本人と日本人以外を分けへだてをするのです。しかも、靖国の「英霊」とされるのは、軍人だけ。今度の戦争で犠牲になつた日本人はほかにたくさんいます。沖繩では多くの民衆が悲惨な目にあひまひました。原爆の犠牲者も大勢います。しかし、そうした人たちは靖国神社では除外されています。靖国神社での「慰霊祭」では、死者は分離され、區別され、差別されているのです。

もともと靖国神社は、西南戦争で戦没した政府軍の兵士の「霊を祭る」ために建てられた神社であり、天皇陛下のために死んだ兵士を祭るための神社です。ですから、西南戦争で政府軍に反旗をひるがえして亡くなつた西郷隆盛は「賊軍」だったので、当然靖国神社には祭られていませぬ。「お上に逆らつたから」なのです。こうした慰霊や死者供養は、人びとのいのちを分段し、差別化していくものです。

ですから、真宗のご法事は自分の身内や親族だけの菩提を弔うというものではありません。ご法事を縁として、一切衆生を救う弥陀の本願のましますことを、親しき者の命日を縁として、亡き先祖や亡き親と共に聞かせにあずかるのです。生者も死者も共に、仏恩を感謝させていただくのが真宗のお仏事です。それが本當の意味で、親への報恩になるので、一切の有情が助けられる法（弥陀の本願）において、初めて我が生みの両親も救われるのであることを聞かせていただくのです。